

2021年12月5日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 目次哲也

奏楽 永井 花

前 奏

招 詞

イザヤ書 第40章 3節-5節

讃美歌

讃美歌 21-16-1 (われらの主こそは)

交 読

詩編 第27篇 (p. 28)

祈 禱

聖 書

マルコによる福音書 第15章 1~20節

(新約 p. 94)

讃美歌

讃美歌 21-242-2 (主を待ち望むアドヴェント)

説 教

「唯一のまことの王」

今日の聖書箇所は一見クリスマスとは関係ないように思えますが、ここを読まないとなたしたちがよく理解できない信仰の真理があります。わたしたちはクリスマスを、救い主がお

生まれになった、そのことをお祝いすると言います。その通りです。では救い主とは何か。どんな救い主なのか。ここに描かれるのは十字架につけられようとする主イエスさまの姿です。言い換えれば、イエスさまが十字架につけられ殺されたということが、どうしてわたしたちの救いになるのかということです。そのことに心を注ぎながら、クリスマスを祝う意味を共に深めたいと願います。

さて、ここでこの福音書を読み直して思うことは、イエスさまが十字架につけられるという記事の中で、一番多くの分量を用いて書いているのは、裁判の記事だということです。それは、イエスさまが十字架につけられて殺された理由は、裁かれたからだ、裁判の判決を受けたからだということです。分かり切っていることですが、裁かれたということは何を意味するのかということです。

そうしますと、イエスさまの裁判について今日の聖書箇

所だけを切り離すことはできません。その前の、大祭司に導かれる最高法院の法廷に、イエスさまが引き出されて、そこで、すでにユダヤの指導者たちの裁きを受けて、死罪に相当するという判決を受けておられる。ところが当時の、ローマの占領下にある人々は、自分たちの手で、死刑執行をすることはできません。実際には、ローマの権力に、それをしてもらわないといけない。しかも、ユダヤ人が最も恥ずべきこととする十字架による死刑を求める。それで、ピラトのところに来て来たことになった。そこから、今日のこの第15章の物語が始まります。

前回、わたしたちはもうひとつの記事を読みました。最高法院、おそらく大祭司の家の広間で、最高法院が会議を開いています。その下の中庭で、イエスさまが最も愛した弟子ペトロが、三度イエスを知らないと言い張った。わたしは、あの人の仲間ではないと言った。しかも、「呪いながら」言いました。おそらく、イエスさまを呪ったということです。「呪う」とは、神の名をもって裁くということ。神の名をもって、ペトロもまた、最高法院と同じようにイエスさまに死の判決を下した。呪

われるということは、神さまによって滅ぼされてしまえ、と言われるのと同じことです。主イエスを、神の名による滅びに定めるようなことをペトロが言っただけでなく、裁いたのは、最高法院だけではない、ピラトだけではない、イエスの弟子たちも、同じでした。

ピラトは、最初、イエスさまを最高法院が望むような、裁きにかけることを望まなかった。それで一計を案じて、このような時に、ひとり罪人をゆるすという慣例があったので、群衆たちに、もうひとり当然みんなが死刑を求めようと思ったバラバと、イエスとを並べ立てて、どっちをゆるすかと尋ねます。群衆は三度イエスを十字架につけて殺すことを求め、群衆もまたイエスを裁いた。つまり、ここにいた人たちが、イエスを裁いた。わたしたちが使徒信条で「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」という言葉を口に唱える時に、わたしたちはこのことを忘れてはいけないと思います。皆が、イエスを死に定めた。誰もそこで、責任を逃れることはできないので

す。

しかもここでは、「イエスがもはや何もお答えにならなかった

だったので、ピラトは不思議に思った」とあります。「不思議に思

った」となっているこの言葉は、本来は「驚いた」と訳すべき

言葉です。どうしてピラトが驚いてしまったのか。それは、「イ

エスがもはや何もお答えにならなかったから」です。この後、

イエスさまはひたすら沈黙を守って、少なくとも、マルコによ

る福音書が記録するお言葉としては、十字架につけられた時、

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」

とのお言葉を言われるまで、記されません。そのイエスさま

が、何にもおっしゃらないことのためにピラトは驚いたという

のです。いったいピラトは何を驚いたのか。彼は裁判官です。

裁判は、人が人を訴えるところから始まります。原告がいて、

被告がいます。原告側は正義を主張します。そして、この人は

こんな間違ったことをしている。だから正義の名によって、こ

の人を裁いてほしいと訴えます。それに対して、訴えられた方

は、全く相手が不当だと憤った場合には、それこそ全力で、わたしは無罪ですとか、その事について責任がありませんとか、自分の正義を主張しなければなりません。あるいは多少責任を認めるにしても、弁護をします。この人が言うほど、ひどい事をした覚えはない。だから、場合によっては「裁判官、正義の名をもって、自分の立場を理解していただきたい」と弁明します。ピラトはそういう裁判に慣れていただろうと思います。だから、まったく弁護しない被告に初めて会って、驚いたのかもしれない。しかもピラトが見ていても、このイエスはどうしても死罪に値するのかわからない。自分で弁明する理由は十分にあるだろうにと思う時に、黙っておられるイエスさまは、ピラトを驚かせている。どうしてもピラトはそのイエスの心を理解できない。もし、ピラトがそこに立たされたとすれば、必死になって弁明したはずです。実施に、このピラトという人は、この後ローマの政治の世界で翻弄され、遂には自殺にまで追い込まれたという言い伝えまであります。絶望的な戦いの中で、皇帝はわたしを誤解している、自分の仲間は、自分を不当に扱っ

ていると、死に物狂いで逃げ回り、自分を弁護して、苦しむ体験をいただろうと思います。

イエスさまがここで黙っておられる。皆が裁いている中で、独り裁きを黙々と受けておられる方がいる。本当にピラトは驚いた。実は、こう思います。わたしたちは、このピラトが驚いたほどには、裁かれているイエスさまのお姿に驚かなくなっているのではないか。もしそうだとすれば、わたしたちの心の鈍さには、大きな罪があるのではないか。どうして皆、裁くのだろうか。もちろん、自分に正義があると思っているからです。正義の名において訴え、正義の名において裁く。けれど、こういうふうにも思います。場合によっては、わたしたちは正義を口実に利用することだってあると思います。正義を口実にしても裁こうとする。裁くことによって相手を退ける。裁くことによって罪に定める。罪に定めることによって相手を拒否する、否定する、滅ぼす。あるいは、少なくとも相手を支配する。だとすれば、＜裁く＞ということは、正義、不正義を超え

て、わたしたちが王様になりたい、それは小さな王様かもしれないが、王になるという思いの現れではないのか。そうであれば、本当に悲しくつらいことですが、そのように裁くことによって、わたしたちは、ようやく自分が自分であることを、保ち得る満足感を知るのかもしれませんが。わたしたちは、大小さまざまな裁判をいつもします。「あれはだめだ」というのも、そうです。「あの人はおかしい」と言うことも、裁判の始まりです。そうすることで、自分はだめでもないし、おかしくもないという、自分自身を確かめる確かさと、その確かさに立つ満足感を覚える。お互いに裁く。そして裁き合いながら、イエスさまが裁かれておられる。わたしたちはそのことに、どれだけ気がついていっているのだろうかと思います。

そしてもう一つ、ここで知っておかなければならないことがあります。おかしい質問かもしれませんが、その答えをしっかりとわきまえるためにも、問いを出すとすれば、ではどうして、主イエスを裁いてはいけないのかということです。皆が

やったということは、これは例外的なことではなかった。皆がイエスさまを裁きたくなった。また裁きたいと思う心を、抑えることができなかった。では、裁きたいと思う心を防ぐためには何をしたらいいのか。その答えを、福音書が語る言葉、そのものから聞きます。2節、『お前がユダヤ人の王なのか』と質問すると、イエスは、『それは、あなたが言っていることです』と答えられた。このイエスさまの十字架につけられる前の最後の言葉は、とても不思議な言葉です。ピラトは、おそらく皮肉を込めて聞いていると思います。お前は、ユダヤ人の王だと訴えられている。どうして、そう訴えるかと言えば、ローマの権力にイエスを殺させようと思うなら、イエスを反乱者とするのが一番好都合だからです。このイエスは、ユダヤ人の王だと言っています。ローマの権力者が容認できない、ユダヤ人の支配者だと言っています。あなたがたの権力に逆らう者です。ピラトは、無力で、縄目を解くこともできないままそこに立っている者を見ながら、この者が、ユダヤ人の王なのかとせせら笑う思いもあって、ユダヤ人の王なのかと尋ねます。

ところが、主イエスは答えます。実は「それはあなたが言っていることである」と。これは、「そうあなたが言っている」という意味の言葉です。「そうあなたが言っている」というのは、どういうことでしょうか。いろいろな理解があるようですが、結論を言えば、この福音書の言葉を伝えた人たち、また聞いた人たちはこう理解した。これはわたしたちにイエスさまがおっしゃっていることだ。あなたは「真実の王か」。それは、あなたがそう言っているのでしょうか、あなたはわたしを王だと認めているのでしょうか、とイエスがピラトにおっしゃられた。そのようにわたしたちも問われるというのです。ピラトは、そんなことを言われる筋合いではない、と腹を立てたかもしれませんが。けれど、ピラトはいざ知らず、この言葉を聞き、また伝えるキリスト者たちは、「わたしたちはイエスさまを真実の王と認めたい」、主に向かって、「そうです、わたしたちはあなたを主と認めます」と言いたかったのです。あなたが、そうおっしゃってください。あなたの言われる通り、あなたは、わたしを王だと言うのだね、とおっしゃってください。わたしたちは、

「そうです」と言いたいのです。そんなふうに、わたしたちはここで主イエスと、イエスさまと対話をするのです。わたしたちが、裁きの罪から免れるのは、わたしたちが王であることを止める時です。あるいは、偽りの王を迎えることをはっきりと拒否することができる時です。しかも、それは、ただひとりの真実の王を迎える時のことです。

ここでお気づきだろうと思います。クリスマスをもまもなく迎えようとするわたしたちが、この出来事から何を聞くべきなのかを。救い主としてお生まれになった神の独り子を、わたしたちは「イエスさまを真実の王としてお迎えします」、「そうです、わたしたちはあなたを主と認め、迎えます」と言えるのかどうか。その言葉と一緒に、イエスさまのもとに立つことを願うのかどうか。

そこで改めて、最後にひとつだけここに留めておかなければならないことがあります。それは、なぜ、イエスさまは

黙っておられたのかということです。真実の、まことの王であるならば、この時こそ、すべての人を敵にまわしてでも、王者としての宣言、「わたしはあなたがたの真実の王である」と宣言なさってもよいはずですが。ところがイエスさまは、ただピラトの言葉を受け入れただけで、その後は、黙っておられます。どうしてでしょうか。主イエスを裁いたのは、ただわたしたちだけではない。神でもありました。イエスさまが受け入れてくださったのは、神の裁きでもありました。わたしたちの罪が、最も鮮やかに表れてくるわたしたちの裁きを受け入れて、けれど、とても皮肉なことに、けれどまた、まことに恵みに溢れることに、この愚かな人間の裁きの中で、神さまのイエスさまに対する裁きが行われている。主イエスは、ただ人間の愚かさを受け入れたのではない。罪を受け入れたのではない。神の裁きをこそ受け入れておられる。そして、裁かれることによって、本当はわたしたちが裁かれるべきであったのが、わたしたちの罪を赦してくださいました。罪の精算が主イエスが裁かれることによって成り立っている。

ピラトは、そこまで驚くことはできなかつただろうと思います。でも、わたしたちは驚きます。こんなことって、本当にあるのですかと思うほどの恵みをここで見るからです。ここに、イエスさまが黙っておられることの本当の秘密がありました。黙っておられることの中にこそ、わたしたちが生かされているという恵みの秘密があります。ここで、イエスさまが口を開かれたならば、わたしたちは誰一人、ひとたまりもなかつただろうと思います。黙って裁かれてくださった。そしてわたしたちに、もうお前たちにはわたしが裁かれているような、裁きと滅びへの道はないと言われます。これは例外なしに、誰にも当てはまる主イエスからの約束です。教会はこの約束を、この恵みをこそ示し続けてきましたし、これからも語り続けます。お祈りいたします。

わたしたちを解き放ち、自由と、感謝と、讚美のところに立たせてくださる、主イエス・キリストの父なる神さま、わたしたちがイエスさまをまことの、唯一の王としてお迎えする

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>